

研究実践報告

# 「はぐくみ」報告2022への応答（2）

徳本 達夫\*・名塚 紘一\*\*

A Response to the “HAGUKUMI” Report of 2022 (2)

Tatsuo TOKUMOTO\* and Kouichi NAZUKA\*\*

「自分自身の問題に、自分で積極的にアクティヴにアクティヴにしているから、アクティヴィスト」（プレイディ・みかこ『R・E・S・P・E・C・Tリスベクト』筑摩書房、2023年、97頁）。若いシングルマザーの白人女性の発言。2014年にロンドンで起きた実話に依る。「彼女たちがしたことについて知らない日本の読者たちに本書をぶち投げます」と著者（4頁）。

## はじめに

以下は、標記（1）を受けている。文責は徳本にある。

## I. 座談会補遺

以下は、座談会中、話が飛んで、削除した徳本分と新たに補足した分である。諸般の事情のため二人の存分な展開は次回を待ちたい。電話と手紙でのやり取りは手間はかかるが、熟考には有効である。アナログ時代を生きる高齢の二人には相応しい。（2023.4.25／10.6）

## 資料1. 補遺

内容的には徳本の教員としての仕事の振り返りが少なくない。個別具体的な説明でないと、抽象的な話に終わる。具体を大事にした分、分量が増えた。小文の主旨からずれる部分もあるが、大学教育の質保証に関わった教員の仕事の一端を綴ることも意味があるだろう。

【1】前稿では、白石・森両会員は教員の立場で報告に参加された（本畝瑞穂・白石崇人・森哲之・田邊日向子・福田聡子・蜂谷日菜子・森望美・山本祐理「教員養成における学生の主体的な正課外活動の意義—広島文教女子大学初等教育学科学生による自主サークル“はぐくみ”の取り組み—」『広島文教教育』第33巻、2018年所収）。両会員からの応答は現時点まで無い。大学教育への内在的な問いかけである。両会員も含め現職教員の応答を心待ちしている。今回、本誌掲載の諸論考は応答の一環とみなし得る。意識の高さに敬意を払い、直接の応答をも期待している。

【2】ゲラ2校の時点で本誌表紙を確認。題目を見た段階で巻頭論文に、と編集委員会に提案したが、実現せず。作業工程的に不可能、あるいは

は困難だったのだろうか。「継続は力」を顕彰する意図は分かる。それでも、それでも。「はぐくみ」報告は超多忙な現場からの、しかも卒業4年目の快挙。学会挙げて応援してもよい祝福事である、と私は思う（内容を事前に読むこと能わずの私は強くは推せず）。その点、編集委員会では投稿論文の査読をはじめ、題目、内容と質の観点から掲載順を決める重要な役割を担っている。その任の重責に敬意を払いつつ、このことを明記する。今後の参考になれば有難い。無遠慮な思いを記したが、学会誌充実に向けてのささやかな提案である。自在なやり取りは学会の活性化に繋がるはずである。

なお、卒業生の論文が巻頭を飾った先例はある。当該巻編集委員会の見識に敬意を表したい。同じ主題ながら、現職教員のそれと違い、広範に主題をとらえ、自らの実践との絡みを論述していた。本来ならば、それらは同じ巻に掲載予定であったが、完成度に拘った卒業生はさらに推敲を重ねた。原稿を読む機会に恵まれた私の執拗な提言を頑として受け付けず。結果、一年遅れの投稿となったが、一年前でも十分意味はあった。彼女は私の師となった。完成度では追いつかない。逆に、不十分であっても発信することに力点を置くことを彼女には学んでほしい。当該会員の論考に対する応答文は作成中である。「保育者教育考（4）—大崎報告2014・2019への応答—」（投稿予定）。

【3】研究誌を交換する他機関には刊行後即送付。当然のこと。他方、学外会員には秋口刊行の機関紙「かわらばん」と一緒に送付。学会誌送付が刊行半年後、とは通常の学会ではありえない。その都度発送するのが本来の姿。執筆者と学外会員に対して失礼だと思う。郵送費の一部は2015年度までは続いた、卒業式当日配布で浮く分も当てる。不足分は予算計上すべきこと。卒業式当日配布方式時代は、印刷・納品期限は絶対死守されてきた。この基本は現在どうなっているのか。在職中は学外会員への送付作業も有志教員・学生と自主的に手伝っていた。単純作業は得意。なお、会計報告は誤植が散見。学会員が預託している公金に対する基本的な感覚がずれていると私は思う。退職の身ながら、正会員としてここ数年、指摘し続けている。現職教員が無関心なのか。そもそも読まなければ分からない。ここ最近の学生の本学会離れの原因の一端か。この件は、事務局が全力で解明すべ

\* 元本学教員

\*\* 元本学施設警備員

き喫緊の課題。どうも熱量を感じない。小文を一読後、対策委員会を立ち上げて動くことを期待している。

【4】インドネシア（旧ジャワ）占領下、国策映画を通して大東亜戦争を正当化し続けた大日本帝国時代。NHKETV「幻の国策映画」の抜粋版。定年まで提示。加害の実態が如実に。これも当時の現地関係者は知っていても、国内の臣民はつゆ知らず。

倉沢愛子『増補 女が学者になるとき—インドネシア研究奮闘記—』（岩波現代文庫、2021年、草思社、1998年、増補）にその経緯が叙述されている（204～8頁）。書物と現場と、両方がないと真相はつかめない、とも。「文献とフィールドをつないでこそわかること」（251～5頁）。1946年生まれの著者は当時の東京大学の大学紛争（闘争）時代に「ノンポリ学生」から次第に闘争へ参加するようになる。時代の息吹への関心が著者のその後の仕事を実らせた。あの時代、政治や社会状況に回答しなかった学生もいた。回答の有無や質量がその後の生き方に影響しているはずである。時務への回答はその後の生き方にプラスになるという一例である。「はぐくみ」の学生をはじめ、社会への関与を続ける若者への励ましとなる。

私は、研究者・学者の次元でも著者の足元にも及ばない。研究の質量と教育の質量とは相互に影響を及ぼす。研究にもかけるべき時間を新任時代に教育にかけざるを得なかった／かけたことはよかったとはいえ、両立を実現できなかったのは私の力量不足。職場事情も。冒頭の著者の言には、著者の仕事、生活の妙手が伺える。なお、旧日本軍の横暴にジャワ義勇兵が武装蜂起を企てた。ブリタル蜂起。主導者はインドネシアの国民的英雄となった。続く。

【5】父方の祖父の反戦・非戦の生き方を十全に学び得たかどうか。母方の祖父岸信介（A級戦犯が戦後、首相の座に就く。戦争責任解明の不徹底さの一例。「妖怪」と言われるゆえん）の影響を強く受けたことは、歴史的にどう評価されるのだろうか。個人としてだけではなく、日本社会として、である。岸の時代から統一教会との繋がりが生まれていたことが判明している。

【6】多様な子どもを想定するには、例えば、灰谷健次郎『私の出会った子どもたち』等、優れた作品、実践書が手がかりになる。児童書も。児童役の学生もどれだけ多様な子どもと出会っているかが問われる。これまで出会ってきた学友もその要素になる。そうした観点から模擬授業に参加し、研究協議の中で授業の内実を深めたい。

模擬授業実施上の時間的制約。1コマ90分で3人。15分授業、15分研究協議が基本。私の手法。15分で45分の短縮版授業。15分で協議。導入2分以内、資料説明は省略。学びが最も深くなるとする部分1、2か所を生授業。指導案は事前配布。各自事前読み。案を越える、想定外の回答を考えて参加し、実際に試みる、学びが

最も深くなるとする部分を予想する、など。その上で研究協議。要求度は高かったと思う。短縮方式は私だけ。

15分で導入、展開と進んだところで当然、開始15分の時点で終わり。肝心の終結には至らない。研究協議に入っても肝心の部分が「案」止まりでは深まらない。45分の授業全体への責任が曖昧になる。下手をすれば、導入段階で無駄な時間を使うなど、誤魔化し術を学ぶことにもなりかねない。授業は教員の専門性が問われる最大のもの。短縮方式だからこそ授業全体に責任を持つことができる。力をつけるには相応の努力が必須であることを学び得る。

45分方式は理想ではない。15分方式で十分である。諸々の制約の中で創意工夫する。職人の世界では常識。形式でなく、実質である。時間・精力は賢く使う。現在はこの短縮方式は生かされているのだろうか。原理原則の学習等も具体的な授業場面で生かされてこそ意味がある。増やすとすれば、研究協議の時間。授業全体に責任を持つ方式ゆえ、15分では絶対的に不足であった。

誤魔化し術はご法度。かつての卒論発表会。スクラ質問のほか、基本的な質問に対しても「今後の参考にさせていただきます」という回答。「今後も研究して下さい。その前に、今、お答えできる範囲で答えて下さい」と私。学科会で話題にして、低次元の世界はそれっきりとなった。誤魔化し術の伝授は教員としては敗北。怖れられる者は畏れられる者でもある。

【7】「当たり前」の崩壊に関わって、思い出したこと。その1。本学着任時、新入生へのガイダンス。当時の学科長、「過去のことは忘れて、未来に向けてしっかり勉強して下さい」云々。第一志望ではなかった学生もいることを踏まえての励ましの言。そのことは承知の上での私の番。「私は歴史を担当しています。ですから過去のことは忘れてもってはいけません。過去を忘れるとろくなことはない、なぜそうだったのか、過去のこともしっかり考えていきましょう。未来は明るくなります」云々。空気の動きを感じた。苦笑いの学科長。学科構成教職員20人足らず。持ち時間3分。多彩な顔ぶれと多様な見解。見事な歓迎と励ましのガイダンス。風通しのいい職場は活性化する。勤務評定以前の職場の雰囲気は格別だった。

その2。本学は例年、幾度となく積雪がある。定時出勤の職員は無論、早い出勤の教員もこぞって雪かきをした。一部学生も自主的に参加した。雪だるまも作った。ところがいつの頃からか、積雪があっても素通りする教員が増えた。国立大定年退職教授にとってはあり得ない作業だったのか。講義時間出勤教員に至っては立ちあう機会すらない。勤務評定導入後は、この傾向が加速されたように思う。学習環境整備という評価項目があれば、除雪作業参加者は加点のはず。人は評価の対象となると評価項目には敏感になるが、そうでなければあえて火中栗を拾

う行為はしないということなのか。今はどうなのだろう。むろん、持病があれば無理は禁物。

その3。ある自動二輪車通勤の職員は、大学近隣の住宅居住者への配慮から途中でエンジンを切り、押して出勤されていた。大型二輪なら爆音もあろうが。謙虚な人。これまた評価項目にあれば加点。駐輪場界隈の落ち葉を会話を交わしながら手で集めたことも多々。これも加点。手作業は確実、案外早いことも発見できた。量次第だが地道なやり方は確かなやり方。人間的に尊敬できる同僚だった。

その4。電車通勤のある教授。川土手のごみを集めながらの出勤。これまた加点。陰徳は隠匿と好対照。後者が権力者によって蔓延る日本。悪貨が良貨を駆逐する好例。本学は良質の拠点。**【8】** 保育原理、通年授業時代の課題。夏季休業期間を活用して絵本30冊、新聞短評20編、虫の絵10種。（半期授業扱い後はそれぞれ半分。）相応の学習効果を上げ得たと思う。（一人、虫嫌いの学生がいて、事情を訊いて免除したことも。今はどうなのだろう。新しい出会いはあったのだろうか。）虫の観察を通して、他者理解と自己との共通性を理解する契機にするという意図。若干名とはいえ、図鑑写しの学生には伝わっていなかったのか。あるいは、意図の理解以上に虫との接触が苦手な限度を超えていたのか。虫との対話を試みてほしいと意図を再確認。

本課題計画の契機は、以前、とある私立幼稚園での光景。地上3メートルを飛ぶ蜂に若い女性教員が殺虫スプレー噴霧。蜂が攻撃する雰囲気ではなかったのに。過剰対応。勤務先短大の卒業生者ではなかったとはいえ、愕然とした。園児に誤った先入観を与えかねない。冷静沈着な対応ができる保育者になるには相手理解が前提。その一助に、との思いから。

**【9】**「蓋をする教員」が新卒だったとすれば、2009年前後の卒業。関連科目は必修だったはず。50代以上だとすれば1980年頃の卒業。選択科目。履修の有無は不明。障害児教育の知見や実践は着実に蓄積されていたから学ぶ材料には事欠かず。私が児童福祉施設実習担当の短大時代にテキストの一冊とした、大野智也『障害者は、いま』（岩波新書、1988年）は「理解よりも、ふれあいを」を強調する。名著。その後、茂木俊彦『障害児教育を考える』（岩波新書、2007年）が加わった。件の教員が大野本の読者なら、あのような対応はあり得ない。現場では実践での学びと共に理論的思想的な学習がものをいう。実践の指針なくしては繁忙さに翻弄される。卒業後は多忙で本読みの時間は限られる。学生時代に基本的な多種多様な本との出会いは実践を豊かにする上で必須である。卒業生が本事例のような反面教師の事例とならないためにも大学教員は質の高い学びを保障することが社会的な責務となる。

教員の年齢に拘ったのは、実年齢に相応しい学びの質量は自律的専門家としての職務を全うする上で修得するという自覚を形にしたいがた

めである。自戒を込めて記す。小文が72歳という実年齢に相応しいかどうか。自己点検が必要になる。誤解のないように記す。年齢ごとに標準的な基準があるというのではない。単に自覚の問題である。自律的専門家としての矜持である。（蛇足：三重県内の特別支援学校の50代女性校長、障害のある子どもへの接し方を相談した教員に対して、「犬に接するように指導したらいい」と答えていたことが明らかになった。現在、勤務を続けながら個別に研修を受けている、という（NR1、2023.12.7））。上記説明で50代をも例示したのは幅を持たせたからであった。校長職に就ける人物。内実はいかに。一定の年齢を超えると、出身大学の教育の問題ではなく、個人の力量の問題となる。それゆえに自ら生涯にわたって学び続ける教員たれんとする意思と能力を限りなく獲得する、自律的な学びの主体となり得る学びの時空を保障する。これは大学教育・教員の責務である。多忙さが幅広い分野の本を読む時間を奪っているとすれば何とも言いようがない。この点でも「はぐくみ」は快挙。**【10】** 特に一般教養。「パンキョー」と揶揄された時代。100人超の受講生。100分授業。10分遅刻後、儀式だったのか、出欠確認に15分。代返で声優の練習。講演調の授業、10分早く終了。正味70分程度の授業。学生の集中力不足への配慮だったのか。出欠確認はその後、一部では出欠表回覧方式、カード方式に改善された。教授自身が出席簿に記入していたのかしらん。教員と学生ともに時間の浪費。当時の大学は研究優先、教育は後回しの時代。学びの証を筆記試験で確認すればいいのだが、多人数。階段教室。不正行為防止対策も不徹底。出題も専門性と当事者性を併せて問うような設問でなければ、銀行型の学びの確認に留まる。自己教育が最良・最上の教育という自覚が芽生えたという点では有難い時期であった。

歴史学の古賀秀男教授、倫理学の杉尾玄有教授等の授業に出欠確認はあったのか。優れた授業は内容が記憶に残る。音楽学は「カレワラ」研究の森本覚丹教授。シベリウスの組曲「カレリア」は授業で聴いた。猫に小判。不覚不明を恥じるばかり。宝庫の鍵は自ら開けないと財宝は手に入らない。教養を高めないで尻込みする。極めて大事な1年間。出席確認儀式は馴化の役割を果たしたのだろうか。あの時間、自分の番を待つ間、私の頭は空っぽだったのだろうか。点呼が順調に進むために皆、静かだった。

専門課程になると改善。それでもノート講義は皆無ではなかった。「道徳教育の研究」授業。丁寧に書き取る学友もいたが、私は手抜き。道徳教育は「ME」、学習指導要領は「指」、等々記号でノート。関連図書を読みながらの作業。精一杯の抵抗。course of study を知らなかったのか、「cs」の略記はなかった。その程度の学生だった。今なら、タイパを生きる若者、ノート講義なんて有り得ないだろう。次第に自作テキストや手ごろな本や市販テキストを活用する授



業が増えてはきた。古書店巡りが日課となった。質問することで空気を変えようと意識し始めたのは3年後期以降。不勉強からの質問は恥ずかしいので本を読んでからの質問。意識が変わると受け身から変わる契機となった。自己教育の充実のためにも専門教育は不可欠であるという自覚となった。

こうした経験が後に結果的に就いた教員として、初年度教育にこそ最上のものを提示して、学ぶ意欲の回復、喚起を図りたいとの思いに繋がった。それが奏功すれば専門課程でも自律的学びが続く。専門性と当事者性とを併せて問うような授業を意識した。上質な印刷教材を共有して学びの質を保障する授業をめざす契機となった。

【11】2年次前期観察実習（実習Ⅶ）の中核となる、地域の小学校での一週間の実習。18人前後の学生と宿泊方式の学び。夜の学習会の交流を通して当日の各自の観察対象とその意図が見えてくる。学生個々が何を、なぜ、観察の中心に置いたかを自覚的に学ぶことを大事にしてきた。自律的な学習である。

担当者4名。ある担当者は実習開始以前の段階で観察対象を予め決めて、全員が同一事項を観察対象とする方式をとった。例えば、掲示を見る、教室環境に注目する、など。観察の対象は多々あるという意識を高める上では大事だが、子どもの動きを見ていれば、自然に眼に入ってくる。その担当者は授業責任者でもあったが、予め方式に指導が統一されないようにした。理由は上記の通り。人的物的環境との相互交渉が人を育てる。環境から刺激を受けながら、より確かなものになるように返す、この循環。観察ゆえ本人の主体性や自覚が問われる。それをお互いに確認する機会となった。意思なくしては見えども観えず。聞けども聴こえず。以上、授業観察の基本の一つ。

観察対象は全てである。目に見えない、耳に聞こえない学校、子ども、教室、保護者、地域等を巡る歴史的社会的経過も観、聴かなければならない。歴史学習の学びの応用である。子どもはそれらを背負って生きている。現場はその時々によって観察の優先順位が変わる。先の予め方式だと臨機応変な対応能力は身につかない。困難にぶつかって人は覚醒する。自己直視による学びである。観察実習でも同じ。予め方式だと、どこまで自覚しながら観察し得るのか。自覚度を高めるためには「先回り」方式は不可欠だと私は思う。

ここでも担当教員の価値観が出てくる。面白い。指導の一致を求める学生もいるが、多様な価値観ややり方から主体的に学ぶことを大事にするという見方もあるのだ、と私。実習後、学びの成果を比較検討しなかったのは後の祭り。数値と感想等で明確にしておけばよかった。それでも担当者として全員（70人前後）の実習後の総括レポートを読む中で自由方式の方が学び度は高いという印象を受けた。逆であれば、速

やかに予め方式に変えていたはず。学生の利益になる方法を選ぶのが対人援助の基本。実習は野外型の学び。現場で最大の学びを意識することで学びを得る。教室型の学びであっても、基本は同じだが、緊張感が違う。

別の創意工夫。宿所にあった複写機を活用。A3用紙を18等分して配布。小さな短冊に各自が観察からの気づき等をメモして提出。A3用紙に貼り付けて、縮小して複写。配布資料を手元に各自の報告を聞き、質疑応答を繰り返す。回数を重ねるたびに観察の視点が広がり、深まる。メモも要点のみを記す形で充実する。そして、日録作成が短時間で完成することになる。これが隠れた目的。

他地域担当時代も日録作成には時間を要していた。それでも当日のうちに完了。前任者から引き継いで当該担当地域を受け持った初年度、日録作成に時間がかかった。就寝23時目標はなかなか達成できず。観察実習が主眼。記録も主眼の一つとはいえ、記録榮えて観察疎か、では本末転倒。若さは困難を乗り越えるが、長続きはしない。学習会の充実と時間短縮、各自の日録作成時間の確保、睡眠時間の保障のための工夫。手元資源の有効活用は現場の基本。複写代1枚10円。10円に18人分の学びが凝縮。付加価値的には莫大。現在はどうなのか。未確認。副担当者が主担当者となっていれば、この方式は継続中だろう。長々と認めたが、多様な工夫は参考になるのではないかな。

余談。一時期は、職場のワゴン車で実習生の送迎もしていた。実習経費節減のため。細心の注意を払いながらの業務。2往復。精神的疲労はあったが、学生の自覚の高さに励まされたからこなせた。その後は、中学生が利用する地域独自の交通機関とタクシーの併用方式。別途、担当者として実習期間中、実習協力校3校への挨拶が任務。公用車による移動。4日間は長すぎたのか、そのうち、公用車が使えなくなつて以後は、難儀した。地方路線バスの待ち時間は半端ではない。待ちながら本読み。そのうち、一部の路線バス廃止。タクシー代は大学負担とはいえ、もったいない。（経費削減に貢献）。かつて地区の中学生は自転車通学したという。所要時間片道50分。私も真似てみた。中学生には勝てない。2時間近く。登り坂は息切れ。自転車を押しながら20分。水無月の太陽でも厳しい。鶯のさえずりが伴走。途中休憩2回。熊の出没を防ぐべく、鈴の代わりに歌声付き。学校はプール開きの準備。幾度か手伝いも。帰路は道路傍らの元原野に族生する蕨の採集を兼ねて。魔の坂は風を切って。全行程半日がかかり。ご褒美は蕨。宿舎の食堂で一品にもらった。以上、65歳定年までの冒険譚。

特筆事項2つ。当該地区の伝統行事の花田植えへの参加。早乙女姿の学生。ほぼ全員が初体験。田植え唄も習って共に唄った。地区行事の華となった。若さゆえの吸収力。地域との連携。宿所では合宿期間中に地域の好意による蜆見学。

幻想的な風景を堪能。初体験者ばかり。河鹿の音も同じく。地域との連携協力・社会資源の活用等を大事にしてきた。現在はいかに。

人手不足に鑑みて学校周辺の草刈り作業を志願したことも。日頃実家で使う機械をはるかに超えた優良機械。快感であった。宿所の植え込みの電気トリマーでの剪定も。宿所での原稿書きの合間の作業。同僚教授が既に実行しておられた事項の引継ぎ。地区住人と知己になったのは当然。今はいかに。要するに大学人もつまるところ一介の大人。多様な能力は貴重である。

長々と記したが、各地域担当者による記録はいずれ必要になってくるだろう。記憶違いがあれば、訂正も。実習生の中にどのように生きているだろうか。

【12】早逝した滝廉太郎のピアノソナタ。10年以上前に初めて聴いた（本学新宅正和教授の演奏）。漢字一文字で曲の印象を表すという事前課題。「春」や「荒城の月」の印象しかない廉太郎。やりきれなさ。私は自然に「定」の漢字が思い浮かんだ。運命を一文字で表せば「定」。廉太郎自身は「憾」の字を当てた。「逆転の動物」が人間とはいえ、廉太郎の「憾み」の思いは今も残っている。才能が病によって途絶する。

対照的にその後の、自己保身のために虚偽発言118回で社会や市民の時間や労力を浪費したトップへの軽蔑は格別。政治の劣化や空転の下、不本意な形で落命する人たちは救われない。コロナ禍下の死者や自殺者はその一例。このことも忘れてはいけない負の遺産。「憾」は音楽の世界だけのことではない。

先人の思いを継承することは連綿とした流れの中の「私」を自覚して生きることになる。防ぎ得る死は無論、非業の死を生む暴力や差別への抗いは必定である。伝統文化の継承と併せて、負の遺産はその超克として位置づけたい。

【13】自己保身からの虚偽発言を長い間、批判できなかった自公政権の国会議員たちは、本心からは首相を尊敬していなかったということなのか。官邸政治の馴れの果て。逆命利君も不在だった。ウクライナ侵略に際しても、27回も首脳会談を誇った実績をもとにプーチン大統領を諷めるべく世界の期待を背負っての訪問を進言する周辺はいなかったのだろう。

当時、地元温泉地の足湯に浸かりながら政治談議を交わした面々からも、冗談として語られただけ。「ゴルゴ13」のことも話題に。市井の人びとの政治感覚を知る上で貴重な場所。それ以上は深まらないのが限界。足湯、銭湯談義。心身が解放されるから本音が交わせる。

【14】シンポジウム参加者は本誌掲載の論文を一読した上での参加。質疑応答の時間が保障できる。学会事務局に提案してみたい。「はぐくみ」さんも自薦を。私の推薦以上の効力があるはず。

お互いの「正義」は平行線。対話が事態打開の糸口。院生時代、論争的な本をある研究室の教員が刊行。そこで批判される側の研究室との

間で合評会を企画したことがある。司会進行も担当。知的興奮が動機であった。両親の夫婦げんかが反面教師だったのか。学生運動の「内ゲバ」がそうだったのか。学問の世界で対話を通してさらに高め合う。理論的実践的なやり取りの中で相互の関係を深めるという思いだったか。記録を報告書にしておけばよかったと思うほど。在籍中はそれが最初で最後であった。記録への拘りはここにも起因する。

## II. 関連事項—時務への応答2023

結果的に座談会は春期の一回限り。その後の日常生活の中での諸事に絡めて、時務への応答2023としてのメモと併せて記す。

### 資料2. 残された課題への回答（2023.4.25/10.6）

#### 1. 学生・卒業生の声は私の現職時代を問う

「はぐくみ」及び本誌掲載予定のゼミ卒業生3人による座談会報告は、私自身の現職時代の取り組みの質を自問する契機となった。現場での壁は同業者と関係者が共同して解決すべきことだが、学生時代の学びの質量がそれを可能にするかどうか。絶えず現場改善の意思をもって取り組むか否か。

一定以上の質量の印刷教材の活用、自学の手引きの配布、関連資料の紹介・配布、時事問題と絡めた当事者の視点の喚起、等々、卒業後の主体的専門的な職業人が育つべく意を用いた。それでも彼らが直面する卒業後の壁の一端を知ると、私の実践の不十分さを痛感する。別途、追加資料の形で一文を認めた（上記3人との共同報告）。

私の在職時代に刊行されていながら、授業等で紹介できなかった良書は本誌でその都度、お詫び旁紹介してきた。それでも決定的に不十分である。2015年定年退職ゆえ2025年までは責任を果たしたい。3年間は休眠中だったので2028年までの責任となる。健康寿命を自覚したい。10年会費の継続会員が健在な限りは、その志の高さに呼応すべく同様な責任を果たしたい。

#### 2. 他者の取り組みは自己の振り返りへ

（1）教育実習体験 理科授業に関しての私のささやかな事例。50年以上前の授業。小3生の教育実習。理科の実験。水の沸騰。水蒸気は見える、とある児童が主張し続ける。水蒸気が空気中の水と結合するから湯気となって見える。100%乾燥空間だと、どうなるのか。水蒸気は湯気ではない。「見えない」から不可視。見えないものは見えない、これを実感する。納得に向けて工夫。ガラス管の中は白くない。ガラス管の出口が即白くなるわけではない。教科書に頼る子どもは簡単に納得する。やかんの場合でも、火力が強ければ、強いだけ、やかんの口から出る水蒸気はすぐには湯気にならない。説得ではなく、納得が学びとなる。

（2）実体験と誤認識 実体験があれば、誤認識はない。空気の圧縮も同じ。圧縮すると



温度が上がる。空気入れで体験的に知っている。未体験との違いは大きい。その逆は温度が下がるのかどうか。未体験。実生活では体験不能。仮設実験授業の出番。思考が働く分、理解が深まる。冬季。吐く息は白くなる。水蒸気を発しているわけではない。当時、授業では思いつかなかった。彼はその後、日常体験で誤認識を超える科学的思考の世界を生きているだろう。

### 3. 大学での事例

(1) 風船の綱引き 理科的な取り組みについて。同期赴任の「エジソン先生」こと、原田正治教授の影響を受けて授業を工夫した。本学一年次初年次教育「人間科学入門」の初回授業。本学着任が1990年。93年頃だったか。450人程度の学生。市販の同じゴム風船。大きく膨らませた風船と小さく膨らませた風船とをパイプで繋ぐ。栓を開けるとどうなるか予想させる。その上で実演。小さい方が大きい方に吸収される。「これが物理の世界。人間の世界は物理の法則に反するようにしましょう。そのための根本的な学びを今から、ここから、この私から。私たちから。」手応えありでした。これ、現場で使えます！ 最近の現実社会は物理の世界以上。情けないこと。

(2) 風船地球 風船を使った別の導入も。教材用ゴム風船を購入。電動式大型空気入れで膨らませる。直径80センチ以上。風船自体はもっと大きくなりえたが。地球と大気、水を可視化することで、大気汚染、生態系保全の必要性を説いたのは、着任後間もないころ。準備に手間はなかったが、面白かった。

(3) 「100人の村」 大講義室の学生を『世界が100人の村だったら』に見立てての疑似体験。大学教育を受けることのできる1人。教室では5人。該当の5人が受けることのできない495人に思いを語る。495人は5人に思いを語る。どこまでリアルな疑似体験となりえたか。限界はあったにせよ、創意工夫は手応えがあった。そのような工夫を大事にする空気、進取の気性が学科・大学に充満していたのは幸いだった。教員全員で学生を育てるという決意が感じられた。

当時は、夜9時時点でも、研究棟は不夜城の観を呈していた。教授はそれぞれの分野で研究書を著していた。教授会の雰囲気も学術的かつ家族的であった。名物教授による教授会進行のお陰で会議は楽しかった。こうした大学の雰囲気や堪能できたことは幸せだった。定員を大幅に超える受験生の採点・合否判定等で帰宅が大きく遅れたのも懐かしい。家族にとっては迷惑なことだっただろうが。その意味では優れた研究書は著者と家族、周辺人との共同作品。自分が年長世代になって順送りができたかどうか。後継者養成に若手同僚と共同研究を続けたのはその一環。

### 4. 模擬授業報告

(1) 後なる者への贈り物 私が実施した道徳の模擬授業の指導案とその結果の報告書3

編（「私は広がる」（『広島文教教育』所収）、「手品師」「卒業文集最後の2行」（『広島文教女子大学教職センター年報』所収））。参考になれば有難い。

「手品師」の時の学生の感想の一つには驚いた。「（私たちにしている）大学の授業と同じでした。」当然。授業の基本は相手が誰であっても同じ。小学生相手・小学生向け資料だから、優しい＝易しい＝緩い、はずがない。学びの真剣さが真の優しさ。根本的なところでの誤解がなぜ生まれたのか。ある同僚は鉢巻き姿で授業。本気度の発揮か、照れ臭さ隠しか。聞きそびれた。私は通常のスタイル。

(2) 創意工夫 模擬授業持ち時間15分間。他の教員は皆、15分間で導入から入り、展開に進む。当然、時間切れ。その後の研究協議は実施されない30分間の授業を含めてなされた。が、無理というもの。肝心の山場や終結等を案のままで協議しても隔靴搔痒どころではない。他方、私は15分で45分の短縮授業を展開した。研究協議は授業全体にわたってなされた。極めて単純な創意工夫。私の短縮版がその後、主流となることはなかった。私は学生には短縮方式で実施。授業全体に責任を持つ学びを求めた（既述の通り）。

概して教授内容に自信のない教員は導入で時間稼ぎをする。世間話である。（私は時事問題と絡めた授業展開を心した。緩い脳では歯切れが悪い。切れを磨くために時務への応答を意識した。）残り時間が短くなれば、駆け足の授業展開。熟考の機会には保障できない／しない。教材研究不足がばれない。手抜き授業かどうかは導入で分かる。速足で駆け抜けければ、景色は鮮明にならない。迷惑を蒙るのは子どもであり、社会である。授業公開を通して、お互いに磨き合いたい。

(3) 理論的実践的授業 旧道徳教育の研究（現、道徳教育指導法）で「手品師」授業等の資料を批判的に検討した時、「それなら実際にやってみて下さい」と有難い要求。その都度、5、6分程度の模擬授業を展開。感想報告書はその一環。その時には上記のような感想は出なかった。旧科目名時代は、原理的・歴史的・総合的に授業を展開できた。むしろ、具体的な指導法も含めて。それが、教員免許法の改正に伴い、道徳教育指導法という名称となった。指導法を主眼とした授業を、とのこと。講壇的な授業を展開していた教員は別として、原理的実践的な授業を行っていた教員は従前同様の授業を展開した。

(4) 5分間の教員資格テスト 「手品師」資料は、教員の資質能力を測る上で最適である。5分も要さない。常識的な読解力・資料解釈のできない教員には道徳授業は担当できない。すべきでないと私は思う。道徳教育という色眼鏡がなせる業か。専門性以前である。不幸なのは授業を受ける子どもたち。本音と建前の使い分けを学ぶ。

授業担当者の私が模擬授業を担当するのが筋。だが、私の出番はなし。小学校教員の体験がないから不適と思われるのだろうか。代わりに義務教育諸学校での教員歴のある同僚教員による道徳模擬授業。それらは私には平板に見えた。で、立候補。報告書に残したのは批判を仰ぐため。せっかくの師範模擬授業。叩き台として記録に残せば、後学の参考になる。記録の公開は「バカ度の公表」（内田樹）。誇りをもって公表したい。現在の実態は未確認。

## 5. 勤務評定とB評価（評定）

（1）球界の常識・教育界の非常識 プロ野球選手の年俸は絶対評価。1億超円の選手がいるから、球団全体の予算上、本来の査定以上に低い年俸の選手が必要という、馬鹿なことはない。絶対評価だから選手全員が本気になる。全員の活躍度が上がり、他球団のそれを超えれば優勝する、営業利益は上がる、さらにファンが増える、活躍度が上がる、再度優勝、営業利益はうなぎ上り、年俸も弾む、と好循環。球界全体が盛り上がる。年俸は所属球団共通の基準に基づき、活躍度に応じて上下する。しかも、推定年俸は新聞報道で掲載。球団間の平均年俸には差がある。悔しいがこれも常識。

他方、元職場の教育界。どこまで絶対評価だったのか。非公表のため不明。職場の雰囲気は、勤務評定導入によって風通しが悪くなった、と私の感想。実際、一度、B評価（評定）を受けたことで、あり得ない評定が実際になされていたという発見にはなった。

（2）恥辱を超えて 私にとっては恥辱であったが腐りはしなかった。引き続き、上質の実践をめざし、報告書で公表する。これまで同様の、それ以上の原動力となった。退職後もその延長・余波で書き続けている。

今回、勤務評定の一部を公表したのは、恥辱を超えて矜持の精神を保ち得たことを示すため。納得できない評定を鵜呑みにすると馬力が出ない。人は所与の評定に見合った自己となりかねない。誠実であれば手抜きか否かは自分が一番知っている。他者の目をごまかし得ても、だ。国民の目をごまかすことができて、自身の心身が悲鳴を上げたという哀しい事例はある。真剣に業を為したという自覚があれば、他者からの厳しい評価（評定）も甘んじて受ける。実際は、担当者に根拠を尋ねても、はっきりしなかった。評価なら改善の手立てが示される。評定ではそれはない。賞与査定の比率に反映される。これまた非公表のため真相は不明。学校という組織がこの基本的な認識の下、機能不全を起こす。伴侶からの叱責は皆無。お互いの育ち合いの証。

（3）ある自治体の長 かつて全国学力学習状況調査（略称、全国学テ）の結果を教員の俸給の査定材料にしようとした市長がいた（前稿では記名）。自らは行政の達成度を俸給査定の材料にしているという報道はない。その点、プロ野球界の評価は貢献度の尺度と根拠の記録が

明確である。その算定資料を元に選手は球団側と交渉する。自己評価と球団評価との突き合わせである。即決の契約更改の場合もあれば、越年の場合もある。上位の機関に申し出ることも制度としてはある。国民大衆文化の一角を占めているからこそその制度・仕組みなのだろう。

大学はどうか。国民教育・文化・教養の根幹を為す世界。プロ野球の制度・仕組みに学ぶことは多い。なお、本件に関しては、以上の通り。他意はない。恨みの吐露でもない。事後であっても声上げは状況を変え得る。根本的には自律的専門家の仕事の評価の観点と尺度の問題である。

（4）大学教育の質保証 余談。ある卒業生が公的研修会に参加した時のこと。講師は大学時代の授業テキストの著者。参考文献に自分たちが使っていたテキスト。嬉しかった、と。卒業後の研修等では、他大学出身者とも学びを共有することになる。その際、自分たちの学びの質量不足に気づくと、傷つく。最低限、一定程度以上の学びの質量を持って卒業させることは卒業生への礼儀である。大学教育の質保証を図るもの差しの一つは、公的研修の場である。研修内容の理解度で測り得る。あるいは教育哲学者大田堯の訃報記事に主著『教育とは何か』（岩波新書、1990年）。教育哲学のテキスト。今なお、読み返す卒業生も。

卒業生各位は、仮に惨めな思いになった時は、速やかに大学に連絡されたい。母校を育てるのは卒業生の役割の一つ。授業料の一部の返金があるかもしれない。支払者は第一に当該担当教員であり、第二にその教員を採用した、力量向上に成功しなかった大学当局か。逆のケースも折あらば、伝えられたい。大学教員には励みになる。その点でも「はぐくみ」に対する他大学研究者の評価は重みがある。

（5）出る杭・出た杭 出る杭は打たれる。出た杭は打ちようがない。ひたすら自己更新に励みたい。自己の業は自他の共通の利益保障のためである。教育関係者の業についていえば、「世界の平和と人類の福祉」への貢献を謳った1947年教育基本法前文の初志である、理想の実現にある。誇りをもって学び続け、業を磨き続けたい。どんぐりの背比べだけは避けたい。

## おわりに

発信と応答とは時務への応答でもある。同時代を生き、歴史責任を生きる者には、時務への応答は欠かせない。高齢の二人にとっては半世紀も若い人の飽くなき学びの姿勢に姿勢を正される。この国を形成してきた一人としての見識を糺される。過敏なのかどうか。応答する身体は相互に新たな自己と他者との出会いを生む。

付記：待望の報告書を一読し、勢いで「はぐくみ」2022への応答を行なった。読みを重ねて47個のメモ。分量的に徳本の発言が多いのはそのせい。続きの座談会を持つにはお互い所用が

ありすぎた。名塚会員には、個人的に大変な数か月であった。お見舞いと引き続きの会員としての発信を願っている。電話の向こうで時事問題に関わって名塚節が炸裂する。次回に待ちたい。

当初、小文を「はぐくみ」に送付し、合作とする予定であった。読み返してみても、問いは私たちが引き受けるべきであることが分かった。題目は「応答」としたが、問いへの自答の部分が多い。考えるべき問いを提示された「はぐくみ」には再度の感謝を。事態は予断を許さない状況である。今日が明日も続くという確約はない。後悔しないためにも足元から、「今」が未来。

「はぐくみ」が訪問した研究室の東京大学教授小国喜弘『戦後教育史—貧困・校内暴力・いじめから、不登校・発達障害問題まで—』（中公新書、2023年）は、「はぐくみ」が課題意識とする主題の歴史本である。他大学の教員や院生との学びの交流は自発的主体的学びがもたらす快感。正課外活動の醍醐味であろう。（2023.10.15）

補記：本年6月、山口情報芸術センター主催行事にインドネシアから芸術家たち8名が来山。倉沢本を紹介して、授業での映像紹介等をやり取りした。武装蜂起のこと、国民的英雄のこと、当然のことながら、彼らにとって国民的な基礎教養であった。

授業の都度、日本における国民的英雄とは誰かに思いを巡らせていた。侵略を受けた側ではないため、侵略側への武装蜂起はあり得なかったとはいえ、国家の暴走に抵抗した人びとはいた。しかし、今日、彼らを国民的英雄と捉える文化はあるだろうか。負への抵抗＝国民的英雄となると、負を遂行した国家社会が断罪される。今なお、戦争責任の検証が不十分な理由である。

その中で渾身の検証。NHKスペシャル取材班『戦慄の記録、インパール作戦』（岩波現代文庫、2023年、岩波書店、2018年）は、無謀な作戦が続けられた軍という組織の粗雑さに切り込む渾身の作。本書を機に戦時中、陸軍報道班員として従軍した高木俊朗のインパール4部作（『インパール』『抗命—インパール2—』『全滅・憤死—インパール3—』（新装版文春文庫、2018～2020年。総頁1524頁）を読む。現場知らずの指揮官が、酒色を耽美しながら現場に命令を発し続ける。現今の政治はインパール状態である。現在を逆照射しない歴史は飾りもの。馴化もの。慢心もの。15年戦争の戦没者の過半数は餓死だった（藤原彰『餓死した日本兵』青木書店、2001年）。

NHKスペシャル取材班『少年ゲリラの告白—陸軍中野学校が作った沖縄秘密部隊—』（新潮文庫、2019年、『僕は少年ゲリラ兵だった』新潮社、2016年改題）。本件の実態を正確には表すには、「少年をゲリラ兵に仕立てた帝国日本」として、主語が大日本帝国であることを明記したい。文庫本では副題がその点を補ってはいるが、正

鵠を期すべく書名に本質を標記したい。少年たちは志願してゲリラ兵になったわけではない。義勇軍でもない。政府への遠慮があるのか。主語を曖昧にすると本質が見えなくなる。

文庫本「解説」の作家仲村清司は絶望的な事実を記す。沖縄戦の事実上の戦争停止の日に帝国日本は全土に「義勇兵役法」を公布した。「通常の兵役とは別の義勇兵として招集する」「国民義勇戦闘隊」として戦争に動員できるという法令である。これによって招集できる兵員は2800万人。上陸してくるアメリカ軍に対峙せんとする作戦である。まさに『「特攻の全体化」を想定した空前絶後の「徴兵制」と言ってい」（251～2頁）。現実化していれば、どれほどの死者を出したか。沖縄戦では県民の4人に1人が戦死。眩暈のする数字である。こうした事実の上に立つて末尾でいう。「危機意識を超えるほどの切羽詰まった凄絶な体験が、戦後の日本本土と沖縄の著しく異なる心理の溝をかたち作ったかと思える」（254頁）と結ぶ。新規促成養成される予定だったゲリラ兵も含めれば、息の音も止まるほどの絶望的な破滅に至っていた。

帝国日本はかくも人の命を軽く扱う国家であった。人命が鴻毛よりも軽んぜられた。この精神構造は今日、どこまで超克されているだろうか。世界的な人権感覚の動きに連動した、若者や若い女性たちの人権、平和、自由を希求する活動が中高年男性政治家たちの「暴走」に歯止めをかけようとしている。高年男性の私はいかに。（2023.11.14）

追記：小文は、並行して取り組んだゼミ生3名との合作とごく一部、重なる。認めた時期が半年以上ずれているとはいえ、社会事象への関心は同じであり、課題は半年で解決を見たわけではない。無念だが。新たな難題。ハマスとイスラエル政府との武力衝突には連日連夜、身体が落ち着かない。

かつて、イスラエル政府からの攻撃で破壊された建物から教科書を探すパレスチナ少女たちの写真と解説文を見た。フォトジャーナリストたちの合作本。辺見庸が巻頭言を綴っていた。その夜、夢を見た。攻撃され、破壊されたコンクリート建物の床下に身を隠そうと必死になっている私。書類が風に飛ばされる、埃が舞っているはずだが、なぜか、咳込むことはない。どうやって反転攻勢をかけるか、思いを巡らす。音はない、振動もない、悲鳴も聞こえない、みんな死んだのか。と、目が覚めた。すぐ雑記帳にメモ。少女たちの身の上に起きた非道・不幸に身体が反応したのだ。錯覚か、0.1mmでも少女に近づけたと思った。当日の授業で学生に紹介した。生々しさが伝わったかどうか。本もメモも焼失したため確認不能だが、2000年前後か。「Little Birds」の映像とともに記憶にあるが。

他方、今回のガザへのあくどい攻撃。ハマスの暴挙は許されないが、以前にも増して非対称



の極みが展開中。新聞の写真と記事を通して事態を知るだけだが、夢には出ない。エンパシーが枯れてきたのか。馴化したのか。

「天井のない監獄」をイスラエルの人びとはどこまで知っているのだろうか。ホロコーストを生き延びた人びとは何を最も大事にしてきたのか。ホロコーストを生き延びた後、その後のイスラエルを見て、自死した思想家、作家レーヴェ。今日のイスラエルはどうだろう。ジェノサイドの体験ゆえにジェノサイドを為す。イスラエルの若い元兵士が自らの兵士時代を振り返る土井敏郎監督『沈黙を破る』（2009年）。自分が怪物になっていたと、国家と軍の歯車であった、と証言。近日中に、その第二部『愛国の告白』（2022年）上映がある。

ブーチン大統領の戦争に続いて、一層厄介な難問が加わった。多くはハマス攻撃を非難することから始めるだろう。だが、歴史的背景を踏まえない見解は「無知の加害」となる。窮鼠猫を囓むの諺通りの展開。圧倒的非対称の現実を前に、息の根を止められる前のハマス側の反転攻勢が意外にも想定を超えた展開から逆に一層の攻撃を受けるようになった、ということか。増え続ける死傷者。最近には娯楽に食指が働かない。世界の、「私」たちの学芸は、世界が注視するなかで展開されつつあるジェノサイドへの歯止めになり得ていない。学びの出番。「はぐくみ」をはじめ、全会員の力を借りたい。（2023.12.5）

追記の追記：2023年のこの国における歴史的出来事・事件の一つ。観賞したかどうか。当事者性を測る尺度になるだろう。森達也監督『福田村事件』公開。渾身の作。「複合的差別」の実態に迫る。虐殺の加害・被害のそれぞれの現場に至るまでの日常があるのまま映し出される。人物造形はその人物としてあった。不特定多数、匿名氏ではない。固有名を持った人物による加害・被害の現場。違和感はない。程度の差はあれ、既視感のある人物。「私」であり、「あなた」である。彼らがある局面で群衆を構成すると、群衆の群衆乗化された異様な圧力の中でその役割を担う。憑き物のように。相殺を超えて空圧は暴に傾く。（言動に必然性のない作品はリアリティを欠く。興ざめする。）当時の事件の再現は不可能だし、限界がある。他方、劇映画ゆえに監督は個別具体的な人物を指定し役割を与えた。女性新聞記者はその象徴。行商一行を見送る少女も。大正デモクラシーを体現していた女性への照明か。大震災の騒乱の中、憲兵によって殺害された伊藤野枝や、同じく逮捕され獄中で縊死した金子文子へのオマージュか。

具体的な人物造形である分、観る側は自分を置き替える羽目になる。恐るべき設定。（私に最も近いのは朝鮮から帰った元教員か。）性的不能に陥るほどの衝撃的な現場に立ち会ったが、その衝撃を語らない／語れないのは、傍観者の自らを明かすことになるからか。夫が朝鮮独立を

めざした闘士たちへの焼き殺し事件を語った後の妻とのやり取り。「……酷いことをしたのね」「ああ。酷いことをした」「私にも」。凄絶な体験こそ打ち明けるに足る信頼のおける夫婦の証ではないか。そのような関係を築いてきたのではなかったか。事件以前の関係は想像するしかないが。事件後の不仲。破綻。妻と船頭との情事を岸から眺めつつ、咎めない。傍観者。夫婦関係における性行為の比重は関係の質量が決める。性的要求に応えられない自身の仮託か。

妻静子は村の空気に同調しない。国策会社の重役の娘ゆえの歴史的罪業を負っているのか。自覚ゆえか、無意識か。村の雰囲気にも染まらない妻は夫にとっての精神的な拠り所か。主だった二人の女性は自らの欲求に正直である。周辺の男性たちの内、「お上」の命令に忠実な人びとが加害に走る。新たな命の生成へ繋がり得る行為と、今ある、これからも続く命への謀殺。忠君愛国の結露。

2023年9月封切。本市では11月中旬公開。3回足を運んだ。公式パンフレットも数回読んだ。シナリオを超えた俳優たちの演技力。カット分、作品は進化した。歴史考証の土台の上の歴史的想像力。歴史考証本の一冊が辻野弥生『福田村事件—関東大震災・知られざる悲劇—』（五月書房新社、2023年、崙書房、2013年増補改訂）。各種資料や関係者の証言を蒐集したドキュメントである。国策の一環としての殺害であったことを実証する。「朝鮮人虐殺は、すべて流言に惑わされた民衆と自警団の仕業のように、責任転嫁されてきたふしがある。しかしこの証言のように、地震の翌日にはもう軍人らによる虐殺が堂々と始まっていた」（32頁）と。立教大学名誉教授山田昭次が追求するのは事件に関する国家と民衆の責任である。「日本人が建立した墓碑や追悼碑に虐殺主体を明記したものが一つもないことを指摘する」（102頁）。国策としての朝鮮併合を契機とする朝鮮人の抵抗とさらにそれを抑圧する大日本帝国との間の一連の闘争。その中で虐殺。虐殺された朝鮮人・中国人、社会主義者、行商人等の人びとへの謝罪と慰霊とを国家の責任として行うのが道理ではないか。映画「福田村事件」はより広範に課題を提示した。次は観た「私」の出番である。

市民としての識見を高めるための社会的資源、社会的共通資本の一つ図書館の活用。有川浩『図書館戦争』（全6巻、メディアワークス、2006年～07年）は、つまるところ、「図書館の自由」を巡る攻防である。いったん成立した法律は、なかなか廃止できない（第1巻、16-18頁）。法の支配力は強力である。政治的無関心のつけは後代も払われる。100年前の事件も同様である。事件への無視・無関心は次の事件を生む苗床になる。事件100年目の標記の再刊本は贈り物である。

西河内靖泰『知をひらく—「図書館の自由」を求めて』（青灯社、2011年）は、「図書館の自由」を求める闘いは社会的政治的状況への対峙

抜きには成り立たないことを示す、当事者による渾身の作である。

時間がないが、記しておくべきこと。勇気を得たこと。マリア・シュラーダー監督『SHE SAID』（2023年）。原作（ジョディ・カンター、ミーガン・トウイー／古屋美登里訳『その名を暴け—# Me Too に火をつけたジャーナリストたちの闘い—』新潮文庫、2022年、新潮社、2020年）で内容を知っていた私にとっても迫真の作品であった。証言という声上げと証拠としての記録を入手する、調査報道のメスが真相を暴く。映像ゆえの臨場感は活字とは違った衝撃がある。被害者の人権・人格を剥奪する加害者を守るシステムの不当性・暴力性を伝え続けるなかで共鳴者が生まれる現場。プロのジャーナリストとしての仕事ぶり。力を得た。製作に際して女性監督は各部門の人員は男女ほぼ同数とした、という。視点の明晰さはこうした配慮の結果だろう。なお、原作では「終章 集まり」が圧巻である。

他方、この国の政治家は政治のプロではないという自己証明。呆れかつ怒りの記録。やはりというべきか。再度の既視感。安倍派を中心とする、自民党各派閥の政治資金規正法違反容疑の告発を受けて東京地検特捜部が調査中。国民にとっての闇の部分の部分が次々に明らかになる。パーティ券のノルマ、キックバック等々、収支報告書への不記載。最大派閥安倍派による裏金が数億円超とか。自浄作用が効かない政治集団。「絶対得票率」は小選挙区で約26%、この国の将来をそのような彼らに委ねて安心だと感じてきた「底抜け」とも思われる感性は何処から来るのだろう。

投票先のない有権者の棄権。低投票率は却って選挙という公的手続きによって正当化される全体主義を生みかねない。「草の根」の「安倍政治」的な力の淵源は次第に解明されるだろうが、政治不信が募って投票率低下が進むと危うい。

12.8の真珠湾・南方方面攻撃から82年。真珠湾奇襲攻撃だけの報道は一面の。

投稿締め切り前。土井敏郎監督『愛国の告白』（2022年）上映とトーク。『沈黙を破る』の元兵士の体験、証言は普遍的なもの。兵士は国家から絶対権力を付与される。自分の力ではない、国家権力の一部を担う。指先一つで老若男女の被占領者を差配する快感。怪物の誕生。それ以前の良心との八つ裂きを強いられ、精神を病む。暴圧の軍を構成する個々の兵士は政治権力の手先としてのそれ。対照的なパレスチナ被占領地には先祖伝来の家、土地に住み続ける一家。そこに存在することが抵抗の意思表示。米軍統治下時代の沖縄の民と同じ。抵抗の証。絶対的非対称の世界。日米地位協定下も同様。個人的なことは政治的なこと。足元に顕現することがらに対峙することで地歩を固める。林典子の作品が映す世界は普遍的な人間の営み。シャツを脱ぎ、白旗を掲げるイスラエル人3人がイスラエル人兵士から射殺された。怪物は抑制が効かな

い。これも菌車。

日本女性に国政参加が認められた日（12.17）。1945年。320万人以上、2100万人以上の内外の死者と引き換えに。女性参政権がそれ以前に獲得できていれば、これら死者はありえただろうか。実年数分の時代の中で生まれた負の遺産の「私」分の責任。正の遺産のそれと。本年2023年は明治維新から156年。分岐点が1945年。「無条件降伏」。戦争に明け暮れた78年と、「9条」下での78年。（2023.12.8/12.17）

付録1. 本学会研究大会（2023.10.27）参加メモ（2023.11.3/11.29）

1. 質問は自己紹介 応答する身体。これが私の生き方。講演やトークに臨んでは応答を心がけている。全くの門外漢の場合でも、それを逆手に取り、素朴な質問を出す。質問は話者への礼儀。的外れであっても参加姿勢がより主体的になる。細胞全開。質疑応答を参加者と共有することで学びは倍増する。学びの質の確認作業にもなる。感想カード方式は補完的な扱いにしたい。これは一般論。10分程度でも生の時間は上質な質疑応答の訓練の場になる。アクティブ・ラーニング（「主体的対話的な深い学び」）の実践の場。活用したい。事後は別の視点からの質問が生んだであろう展開を想像する。／2. 私の質問（1）ここでは若松昭彦広島大学大学院教授による講演（本誌読者にはおなじみ。当日の講演は本誌に掲載のはず。故に概要は略）への質問。参与観察による実践的研究が前半。濃密な報告。普通学級での児童の成長の姿。教師による学級状況認識が子どもの成長を生む。後半はインクルーシブに関わる最新知見の紹介。映像資料も含めて。知的障害者の当たり前を突き破る。（2）私の質問。3人目。講演の前半部分と後半部分とを繋ぐ質問。前半で見られた児童の質の高い学びは、後半の映像が象徴するような、それまでの既成概念を崩すような、学校の当たり前や社会の当たり前を突き破るようなものになるのだろうか。（3）意図・背景は以下。学びは状況適応型のそれに留まることなく、状況変革型の学びに進むのが本来の姿である。適応型の学びが主流である中、既成概念を揺さぶり、突き崩す学び・学問が求められる。その一つ、障害学の誕生後は、状況は改善の一途である。変革無くしては障害を負わされてきた「障害者」の人権保障は進まない。医療モデルから社会モデルへの転換はその象徴。非対称から対称への道筋は見えてきた。すべての者が当事者性を担うことになる。解放のための学問・学びへの志向ともなる。置かれた状況に敏感になり、その非道・不合理を問うことなくしては自らの尊厳は守れない。R. ニーバーの至言。変えられるものは敢然と変えていく勇気が欲しい。学びは本来動詞形である。飾りではなく、实际生活に活用されることが本旨である。学びは力を得る。学びは解放学。桎梏からの解放をめざす。自発的隷従のための学びではない。これらを前提とした質問であった。私が担当していた障害児教育の研究・特別支援教育では、これらは基本的な共通理解であった。学校という枠を出ない、学校を問い直すことに繋がらない学びは学びの名に値するのか。「学校」の代わりに、既成のあらゆる物事、と言い換え



る。本質を突き抜ける学びを。小村報告でいえば、「幸せになる」起点は当事者としての声上げ。／3. 他者の質問への私の未発の応答（1）／（1）辞退したバイト：以下、別件の説明から。私は教員の道で生業を得る前に、20種類以上のアルバイトを体験した。その一つ。ある国立大付属高校生の家庭教師。受験生だったか、2年生であったか。英語と数学。英語はともかく、数学は必死であった。私が、である。欠点を取っていた科目。悲壮感が漂っていたはず。彼は大人だった。こちらが本気であった分、大目に見てくれた。だが、いくらなんでもこれではぼったくり。事情を話して辞めさせてもらった。（自分で辞退したのは、学生服姿の、いかにも苦学生による訪問販売に次いで二つ目）。伸び代が未知数の相手。伸びる芽は然るべき師が担ってこそ。ゼミ生に対しても同じ。幸い、担当を辞めるという事態はなかった。私も論文を書き続けた。私の場合、書かなければ指導はできなかった。私が呻吟した分、指導のヒントになった。学生がどこまで伸びるか。楽しい挑戦であった。／（2）伸びゆく学生：当時のある先輩教授の言。「あなたは短大で学部の卒論を、学部で大学院修士論文を、大学院では博士論文を、やらせている」と。私の返答。「でも、学生はそれだけの力を出していますから。達成感・成就感を味わう体験は大切です」。過大評価はさておき、心理学専攻の教授の目には過剰要求に見えたのか。別の例。学校教員を生きるあるゼミ生。「現場は大変ですが、ゼミ時代を思えば、なんてことはないです」。卒論作成で力を付けたという自信からか。過剰指導に堪え得たということか。常にゼミ生の様子を観ながら関わった。「ひとしく、その能力に応ずる」の応用。各自が伸びるような各自の実態に即した関わり。ゼミ生はそれぞれ自己の学びの最大値をめざしたのだろう。しかも、集団指導方式。伸び代は個人指導の場合以上であったのだろう。それが彼女を支えている。加えて、ゼミでは真理・エロスを求める同志という感覚は共有できていたと思う。／（3）「発達最近接領域」：結果として「発達最近接領域」を、その理論を知る前から実行していた。子ども時代に培った導き術なのだろう。異年齢の子ども集団では全員が楽しく遊ぶためにハンデをつけたりする。年下も背伸びする。そうした要望に応える術は体得し続けていたのだろう。また、そうでなければ、集団の中で年上面はできない。子ども集団を生きた者が結果として獲得した宝だろう。初等数学分野の修論指導に際して遠山啓の著作集にも当たった。成果物を江湖に示すことで外部評価を待つ心境だった。（その成果は本誌所収）。／（4）ある質問：承前が長すぎた。本題。ある教授の質問「どこまで伸びるかの見極めをどのようにするのか」という趣旨。解答は別として、私には違和感あり。われ違う、ゆえにわれ在り。問いは逆ではないか。伸びをどこまで支え得るか、どこまで伸ばし得るか、自らの力量は指導に値するか、ではないか。東大先端科学技術研究センター人間支援工学の中邑賢龍教授による、「枠からはみ出したまま、特化した才能をつぶさないで、いきいきと生きられる社会を作ろうという」異才発掘プロジェクト（伊藤詩織『異才、発見！—枠を飛び出す子どもたち—』岩波新書、2017年、61頁）。「本質の才能が表面に出てくるまで挑発す

るしかないのです」（183頁）、「必死に生きる大人を見せたいです」「コミュニティー全体が生きるための勉強の場になる（中略）町全体が学びの場所になる」（189-191頁）。相手よりも自分が上だ、という過信や傲慢からは生まれない世界である。なお、私はゼミ生が他の教員の指導を受けることを歓迎していた。学びの世界は広いほどいい。比較対照から本質を探る。「学級王国」ならぬ「ゼミ王国」は害あって利無し。ゼミ生を伸ばすには他流試合に限る。関係の悪化はなし。抱え込みが結果として関係を壊す。「ガチャ」の世界の固定化である。学生は自らが最大限伸びるであろう人物を指導教官に選ぶ。私もそうだった。仮に伸びなければゼミを変わるという手がある。実際、ある学生は4年次で卒論ゼミを変えた。前例がないということで学科会が何度も開かれた。決意の固い学生。最終的には学生の希望が受理された。私の指導方針は以後も変わらず。彼女は本学会誌に3回掲載。研究大会でも報告。質疑応答でも十全自らの思いを展開した。幾多の困難を越えて実現した経験は彼女にとっての宝だろう。学生の伸び代に蓋をするのは論外として、ゼミ生の信頼と尊敬の対象となることが学生が伸びる前提。書きたいことを共に探る中で学生が自ら気づく関わりを目指す。／（5）お釈迦様のやり方：究極の手助け・指導は、手助け・指導があったとは気づかないで然るべき方向・状態になることだとか。高校1年生だったか、坂道を上る大八車。後ろから押し続けて登り切る。遠慮はしたものの、結果的にお爺さんからバンを頂いた。成人後に知ったこと。お釈迦様は気づかれないように押す、という。それが本人の自分の力に対する信頼感を増すことになるからという。私はいかにも未熟であった。確かに、その坂道はいつも通る道のはず。特段、その日が困難だったわけではない。しばらく様子を観ていれば、必要のない手助けだったかもしれない。過剰な関わりにならない、いい塩梅の関わりは相手の現実が観えてこそ。ゼミ生が自身の見解と幾多の意見とを突き合わせ、自ら納得する関わり方である。依頼心を抱かせる方法は不可。似非指導。洗脳予備軍を生む。／（6）居場所：ゼミを選ぶ理由の一つが居場所。ある学生は卒論の中で高校時代の痛みと共に綴った。信頼されることは伸びる底力の源泉となる。寄り辺無き者は自ら居場所を作り出すために莫大な精力・時間・資金を使うことになる。いずれか欠けた／不十分な条件を補うために他の条件を過度に使うことを余儀なくされる。必要最低限の居場所たり得るかどうか。伸び論以前の最要点である。その学生は自身の内部から発現し続ける力を感じ取ったのだろう。卒論の主題を主体性の発現を巡るものにした。先駆的な実践を展開する各地の保育施設で任意実習に取り組むなど、その馬力は目を瞠るばかりであった。本来、各自が内部に有する主体性の発現を巡る行為は、いかなるものであれ、許されるべきではない。当事者のみならず、社会全体の不利益・損失である。遮る者も、自身の主体性の発露を遮っているのだから、二重の不利益・損失である。遮る者にそもそも居場所があるのかどうか、ここを見極めることから始めたい。彼女は卒業後も優れた実践を重ね続けている。現場で多忙を極める中、ごく一部でも報告が読者の目に届く日を心待ちにしている。むろ



ん、この呼びかけは彼女に対してだけではない。全ての会員の発信を心待ちにしている。／4. 他者の質問への私の未発の応答 (2) / (1) 意見と異見：学部4年女子学生の質問。外国にルーツを持つ子どもへの対応はいかに。時宜を得た質問。私も考えつつ、共同研究者の回答を聞いた。その一部が不適切な関わり方に対しては厳しく指導する、という趣旨の部分。この回答の深い部分を知りたいのと、疑問を感じたのとで挙手。だが、時間切れ（学生司会者は時間厳守を第一とした）。閉会行事後に見解を窺いつつ、私見を述べた。いじめ等の不適切な対応が相手を傷つける。このことはお互いに日常的に体験しているはず。最終的には厳しい指導、あるいは自覚となるのだろうが、そこに至る過程は異なる。回答では教師からの指導。子ども自身が気づくような指導はあり得ないのか。講演の前半部分で子どもの成長の姿が示されたが、子ども自身が気づく学びの方が深い学びになるという証差であった。その応用にはならないのか。／(2) 自己直視による学び：自他の生命の危険に関わる場合の緊急対応は必須。これは大前提。そうでなければ、自己直視による学びの方が子どもにとっては臍に落ちた学びとなるのではないか。2時間前の小村報告。子どもの不適切発言をひたすら板書。発言の主は自己直視させるという事例があった。私見は言にも繋がる。参加者の意見はどうだろう。全体で問題を共有できなかったのは残念。解答を正解と捉えるのではなく、解答を深く、広く吟味することが必要になる。この学生の場合も、私見を述べた上での見解を尋ねると学びが深くなっただろう。質問者の特権である。回答には同意か、深化か、異見か、応答したい。／(3) 質問の周辺：私は子ども、学生の質問には即答しないようにしている。「いい質問だ」との応答もしない。質問は全て自己紹介。質問者にとっての「いい質問」。まずは質問に感謝する。私を超えた質問には身体が驚嘆する。その旨、伝える。回答しつつ、交流を図る。質問の意図、周辺事項、体験等を訊ねる。質問の世界が広がる。共有する範囲も広がる。この辺りの妙はNHKラジオ第一放送の人気番組「子ども科学電話相談」で学べる。基本的知識のみならず、解答者の対応が子どもを惹き込む。子どもの声の反応だけが判断材料だが、納得の声には表情が出る。大人のファンも多い。全ての者にとっての学びの時空となる。／(4) 子どもへの対応：結論的に言えば、対人援助職では判断基準を研ぎ澄まし、判断材料を幅広く蒐集し、アセスメントに活用する必要がある。さらに具体的な対応策として、相手の最善の利益に合致する形で応ずる、最後にその対応を適切に評価することが必要になる。これら一連の過程を経合的に捉えて初めて学びの材料となる。他者の実践についても、以上の4つの段階を経合的に捉え、考察することが必要となる。不首尾に終わった事例であっても、4つの観点からの総合的な対象化が求められる。こうした過程を踏まえない学びは上辺の理解になりかねない。／5. 懇談会 (1) 3枚の紙：参加者は学生30人？卒業生等20人？教員学会事務局他10人？あちこちに交流の輪。学生の熱意が充満。例年は卒業生が1、2分程度の一言メッセージ。今回はなし。希望して3分間時間を頂く。事前に用意した3枚。その1. <26=3800000000>。こ

の等号が成り立つ世界がある。以下、解説（略）。その2. <60/65→60/72→60/120>。限りなく1に近い。せめて0.5とすべく120歳まで生きる。と、笑いの渦。義務教育終了後就職した友人たち→9/72→9/120。解説抜き。多様な経験が人を創る。他方、学校体験が本質を見抜く生き方を結果したかどうか。学校外体験がリアルな人生を結果しているのではない。その3. <「第九」150 20>ウクライナ国立フィルの山口公演のチラシを掲げて馴染みの「歓喜の歌」を歌う（30秒）。ウクライナやパレスチナの人びとへの思いを込めて熱唱。が、後半から手拍子が入った。「第九」で手拍子とは、初めての経験。紙を掲げた右手で続ければ良かったが。後の祭り。久々のプレゼン。教員病。全ては語らず、余韻を残す。3分では収まらなかったが、5分未満だったはず。／(2) 学生との対話：多種の質問。それだけ日々、考えながら生活しているという証。子どもからの質問に答えられずの学生。質問は子どもに返し、共に考える（上述の通り）。工藤勇一本の紹介への関連質問。現職時代のモード。学びの共同体を実感しえた。別途、有志で報告書作成もありえたか。強い意思を感じた分、当日の熱気を参加能わずの会員に届けたい。在学生の母親がソプラノで参加とか。広島での「第九」のことだった。／(3) 文教士の出番：小文作成中、偶然、耳にした情報。教員不足対策に、社会人対象のいわゆる「ペーパー・ティーチャー研修」。数週間、基礎的事項を研修後、非常勤扱い。その後、特別免許や臨時免許を交付する方式、との報道。(NRI、2023.11.3放送) 本年3月。本学学部改組後最初の卒業生。就職率99%超え。「逞しい実践力のある教員」は文教から。研究大会参加効果は抜群。次回、さらなる盛況を。学会「活動報告」の充実を。小文が補足となれば幸い。本誌配布が秋口では宣伝期間が短すぎる。賢治も泣く。学会活性化に学会事務局自ら水を差す愚。「逆明利君」はいずこに。小人閑居して不善を為す。小文を認めることで不善を為す暇がなくなった。「洗脳されないように」との、元同僚からの在学生に対する「有難い」助言・忠告もあり。ものごと見極める力を持った学生が育つ時空を創る。洗脳の心配は無用。／(4) 出る杭・出た杭、出さない悔い 「万物は流転する、強制を去れ！」とは、コメニウスの至言。あらゆる生き物は自ら伸びんとす。同調圧力のある日本社会では周りの眼を意識しすぎて、本来の伸びを閉じ込める。出る杭にならない／なれない。馴化すると出る思いそのものがなくなる。やがて出さないことが基本になる。それも長くは続かない。自らを閉じ込めてきたことを悔いることになる。悔いは後から来る。閉じ込めると他者と出会えない。より多くの眼に触れ、批評・叱正を求めるべく、発信を江湖に示す。世界は広く、優しいことは直に分かる。それほど世界は広く、優しい。文章は簡単には消去できない。不特定多数の、未来世代を含めて発信するとなると、当然、より真剣になる。文章修業は人としてのそれでもある。それゆえに曰く。文は人なり。他方、仲間内の会合では地が出る。精神が緩むと本音の失言や妄言も飛び出す。時と所を待っていたかのように。覆水盆に返らず。この国ではこの諺が死語になりつつある。責任転嫁の定番「誤解を与えたとすれば」が常

套句の世界では、世界の広さ、優しさは味わえない。図らずも長くなった。当日出会った在学生の熱誠の塊への応援歌である。繰り返さなければ良いが。学びは吟味して、自らの身体を潜らせると、血肉化する。小文は質問や報告書に拘る72歳会員による具体例。声上げ、質問が閉塞状態を拓く。刮目の再会を冀う。ロールモデルはある。4、5年前の先輩による「はぐくみ」報告への他大学研究者の賛辞は「半端ない」。未読なら是非。学生生活への熱量が高まる。本学のみならず、他大学の学生・教員、社会人との交流は高い専門性と豊かな人間性を相互に育み合う時空となることを実感されるだろう。「はぐくみ」報告2022への応答（投稿中）も併せて。

**付録2：本学会の活性化策（私案）（2023.5.20／11.15）** これまで折に触れて言及、提案してきた。整理も兼ねての私案である。（1）**現状** 暗転なら良いが現状は暗い。①卒業生の10年会員登録の激減。2017年110／126、2018年88／121、2019年75／110、2020年49／110、2021年51／125（会員数／卒業生数。各巻の「活動報告」による）コロナ禍の影響は見逃せないが、従来はほぼ10割であった。事務局は統計一覧を作成し、現状を共有したい。②2016年から数年間、学会誌の総頁は80頁前後。100頁未満は会員数（卒業生会員約1000人？ 学生会員約600人）に照らしてあり得ない薄さ。全会員と現状を共有したい。③財政の脆弱さと費目の問題。本誌第37巻、2022年130頁表1。2021年度収入決算のうち、会費収入は約85万円（10年会費登録が4割の51万円）。支出約106万円。総会と研究大会開催中止により支出0円。両者に関わる経費は過去の実績によれば概ね16万円。必要最低限の経費は約122万円前後。赤字約37万円。収入が現状のままだと仮定すると、学会基金400万円の一般会計化以後の繰越金約280万円。7年で会計破綻の蓋然性は高い。表3の予算案のままだと、2年で破綻しかねない。杞憂かどうか。全会員と現状を共有したい。④誤植。収入予算の欄、10年会費125人で125000円。1250000円の誤植。合計欄も誤り。杜撰である。正誤表ないし訂正版を公的に掲載されたい。（2）**対策（私案）** 対策は極めて単純明快。①卒業生が全員10年会員となる本学会伝統の復活と継続会員の増加。鍵を握るのが学会の魅力の向上。狸の皮算用を試算する。毎年約130万円。これに学生会費が約30万円。継続会員1割で単年度約15万円。大学教員会員は倍額に改定約3万円。総計約178万。持続可能な収支となる。学生会費倍額だと約60万円。総計約208万円。さらに安泰。学会の魅力向上と母校へのさらなる信頼の醸成が鍵。学会誌が充実を続ける限りは、会員は途絶することはない。②卒業生会員および現職・退職教員会員の投稿。難しいことではない。年会費1000円の学会は寡聞にして聞かない。1985年創設以来の学会費据え置きはギネスブックもの。これも過去の卒業生がほぼ全員10年会費を前払いしてくれたおかげ。学会への信頼あってこそ。信頼に応えることは基本。③会計の現状に鑑みて必要最低費目以外は当座、凍結する。現行の研究助成金40万円予算はその最たるもの。④10年会費会員の減少はコロナ禍の経済的逼迫が大きな理由だとしても、単年度会員方式もある。学会誌・機関紙の最新情

報を得て、登録の動機にする。同窓会員からの「大好評」情報が決め手になる。ここでも①と②。2017年から21年までの未登録者220人がどこまで満足し得るか。逆に言えば、同時期の373人の会員の満足度次第である。⑤従来の学会誌の卒業式当日配布の復活。郵送費150人分が浮く。⑥学外会員への学会誌の4月送付。これは常識の次元。未登録卒業生への間接的広報の一助になる。⑦会費値上げ。教員会員2000円と学生会員1000円に倍増。10年間前納方式は絶大な信頼のある場合に限られるが、基本は単年度方式。学生は学会費負担の複写機設置の恩恵を受けている（2台で約70万円。全学会費の2年分）。⑧財政逼迫の場合は最後の手。学会誌の隔年発行、機関紙の自前発行などか。（悪夢が正夢になっては困るので以上）。⑨満期前でも郵便物返送の場合や、不幸にも逝去された会員にはどう対応しているのか。迂闊ながら私は知らない。⑩危機管理も。万一、学会誌・機関紙発行の経費が底をついた時の対応案を提案し、総会等で承認を得る。その時点で満期前の会費は返金する。あるいは縮小してでも10年会費会員がいる限り、発刊を続ける責務がある。経費不足分は寄付行為か。公的な機関の責任を担うことの重みを再度、全会員で自覚したい。各巻の学会情報に関心を持つ会員はいかほどか。（3）**徳本会員の場合** 私は浅学非才の身ながら現職時代は、学生が卒業時点で全員、10年会員に登録したくなるように学会の活性化に努めてきた。投稿、学会誌の授業での活用、学生の投稿支援、卒業生への投稿呼び掛けと支援、総会や研究大会での質問等、懇談会参加と盛り上げ、10年会費切れの卒業生への継続呼び掛け、学会誌郵送作業の手伝い、卒業生の学会報告への支援、配布資料作成支援、等々。以上、10項目以上。一回だけ、役員に選出された。その際、会合では飲食を極力減らした。なぜか、役員は一回きり。編集委員を担当した期間は吉田会員と共に、100頁以上を死守。卒業式配布をめざして印刷所との連携に努めた。以上は特段難しいことではない。教員会員であれば誰でもできる。（4）**退職会員への呼びかけ** このまま会員数激減傾向が続けば淋しい一入のはず。学会誌充実のため奮って投稿されたい。卒業生は鶴首して待ち焦がれているはず。とりわけ、在職時代は職務多忙で実行できなかった退職教員にはより強い自覚の覚醒を冀う。少なくとも、現職時代に10年会費を納めた卒業生たちが会費切れになるまでは学会の充実に関しては責任を負っていると私は思う。退職後10年間である。卒業生への礼儀である。無間地獄ならぬ、永遠の知の楽園である。会員各位、いざ、集わん。この作業を怠ると、ほったくり、と関西では非難される。「心を育て 人を育てる」大学の重鎮として職務を全うされた証を果たす。これが後輩たちの手本となる。かくして魅力倍増の学会誌が吸引力となって全員が10年会員になるだろう。継続会員も倍増するだろう。かくして「文教学会」は永遠に不滅です。」健康寿命継続という効能もあろう。2015年度退職の徳本も非力ながら、細々と続けている。（総会案内）本年度も学外会員への総会案内はなかった。開催されなかったのか。総会は予算審議という大事な議事がある。正確な会計報告は会員に対する最低限の責務である。（蛇足）ある年の総会。1996年頃だったか、投稿常連会員は毎年の投稿は遠慮

してほしい、と。学会にあるまじき見解がまかり通った。他大学に転出された会員と共に反対の意を表明したが、多勢に無勢。数年は投稿しなかった。しかし、どう考えても馬鹿な話。その後は従来通り。まさか、常連投稿者への妬み？あるいは、もっと本格的な研究物を物せよ、ということだったのか。専門学会誌への投稿はハードルが高くて私には無理だった。議事録

はどう記載しているだろうか。無駄な空白の期間。本会の負の歴史である。貧すれば鈍する、とならないようにしたい。新たな負の歴史の到来は防ぎうる。防ぐことなくしては他機関との学会誌交換は不可能になる。学科予算の流用ということは最悪の事態。再度の確認。現状のままだとあと7年しか持たない。最悪は避けたい。知恵の出番。(2023.11.15/12.18)